社会福祉ニュース
2012/03/31

Contents

巻頭言	p.1
2011 年度研究報告	p.2
2011 年度活動報告	p.4

≪巻頭言≫
忘れられていた津波

副所長　河野 哲也

この巻頭言を、出張先のタイ・バンコックで書いています。ちょうど東日本大震災から一年が経ち、日本ではかずかずの追悼の催しが開催されています。犠牲になられた方とそのご遺族には、心からお悔やみ申し上げるとともに、避難生活を続けている方々には、励ましの気持ちをお伝えしたいと思います。

今回の震災とそれに続く原発事故は、日本社会の問題点をくっきりと浮かび上がらせました。この点についてはさまざまに論じられていますが、ここタイに視点を移すと、また違った問題点が浮かび上がってきます。

ここバンコックの人たちと津波の話をすると、彼・彼女らが自分たちの経験として生々しく思い出すのは、2004 年に発生したスマトラ島沖地震のようです。スマトラ島北西沖のインド洋で発生した地震は、今回の日本の震災のエネルギーの 1.4 倍という凄まじいもので、インドネシアでは 22 万人を超す人命が津波で奪われました。タイのプーケットには 2 時間半後に津波が到着し、時間の経過がかえって災いして、海岸にいた多くの人々が失われたと聞いております。

22 万人という数字は、今回の日本の津波の犠牲者の十倍以上です。その当時に映された津波の映像を見ると、地震の後にすぐに高い建物に避難しなかった人々が犠牲となっています。地震発生からかなり時間が経ってから、複数の津波が時間をおいてやってくるという事実を知らなかったゆえの悲劇です。東北を襲った津波も構造は同じです。スマトラの地震と津波被害に十分注目しておけば、今回に震災の前に大きな教訓を得たのではないでしょうか。

わたしたちの問題は、同じ地震国として、このインドネシアやタイの津波を自分のこととして真剣に受け止めたていたかということです。決してそうではないでしょう。スマトラ島沖地震の後に、日本で地震や津波に関する議論が真剣になされたという記憶はありません。

日本はバブル崩壊以降、国内ばかりを見る内向きの国になったというのは本当だと思います。外国に降り掛かった出来事を、遠い国の無関係な出来事して見る態度では、他者の経験に学ぶことができません。スマトラ島沖地震に無関心だった態度は、アフリカの政治にも無関心、中東の民主化にも無関心、ヨーロッパの移民問題にも無関心という態度に共通しています。津波は天災ですが、被災には人的要素も含まれます。今回の震災被害の遠因として、海外に関する無関心、一般的に、自分と直接に関係のない他者に対して無関心な、内向きの態度を付け加えるべきであろうと思います。

さて、この 3 月末を持ちまして、2007 年より本研究所の事務局をつとめていただきました酒本知美さんが、異動のために退職されます。これまで、本研究所の実質的な運営を担っていただきました。全所員を代表して感謝の気持ちを捧げたいと思います。ありがとうございました。

≪2011 年度研究報告≫

博士論文「記憶と感情の社会学—認知症とコルサコフ症候群のフィールドワークから—」

佐川佳南枝（熊本保健科学大学・社会福祉研究所研究員）

立教大学社会学研究科に2011年度に提出した博論のテーマは「記憶と感情の社会学」というもので副題は「認知症とコルサコフ症候群のフィールドワークから」としています。作業療法士として臨床現場で働くなかで、社会学、ことに構築主義の言語至上主義、そして身体性の無視には違和感を持っていました。「現実は言語によって構築される」と構築主義は主張します。また記憶についても現在の観点からの他者との言語的相互作用によって構築されるものとされます。認知症が進行し記憶が失われゆくと、他者との意味のある会話は不可能となり、言語自体も崩壊していきます。しかしそれでも親密な他者との関係性は維持され、現実を構築していくことは可能です。認知症のように記憶が失われ言語が崩壊するとき、そこにまだ社会的関係性が形成されているとするならば、そこでは感情というもうひとつの機能が最大限に利用されているのではないかと考えました。私たちは言語を使わなくても目配せや表情、仕草や体勢など前言語的なもので私たちの感情を伝えあうことができます。つまり言語という冗長なものを介さなくても、身体をとおして感情は一瞬のうちにあふれ出し伝わってしまう。身体をとおして感情を媒介に関係性がうまれ、やがて社会の原初の姿が形づくられる。本論文では、このように原初的な社会の始まりを想定しています。

論文のなかでは自己が感情と記憶をもとに、どのように関係性を形成し、社会を形成していくのか。また逆に、記憶が失われゆくとき、自己はどのように他者との関係性を保ち社会の中に存在し続けることができるのか。これらの問いを記憶、感情、自己、社会をキーワードに考察しています。同時に記憶の社会学と感情の社会学において主流となっている構築主義についてその有効性と限界を検証すること、さらに新しい視点からのケアへの手がかりを見出すことも副次的目的においています。また社会学が社会学として成立する過程で切り捨てられてきた身体の視点を取り戻すことの重要性も主張しています。

フィールドとしたのは重度認知症デイケアであり、デイケアに通所している通所者と家族、そしてスタッフを対象としています。第一部を理論編とし、第二部を実証編としています。第一部では社会学と自然科学との間に生まれた対立の背景、記憶の社会学、感情の社会学の系譜をたどり、自然科学領域における記憶研究や感情研究と比較し論点を抽出しました。第二部は問いを探求するための4つの実証研究により構成されています。

本研究会でも2010年１月に「戦争の記憶が語られる場—認知症高齢者たちの語り合いから」というテーマで報告させていただきましたが、博士論文では【第7章 認知症高齢者たちの戦争をめぐる語りの場の形成】として再構成しました。戦争体験の共同想起は、自己が弱体化しつつある人々に感情の高揚をもたらし、集まることにより情動伝染が起こり感情エネルギーは高まり、ムードサインを感受しあいながら無意識的に身体化された儀礼によって身振りや声を調整し合い、相互作用秩序は維持されていました。ここに言葉が生まれる以前､集合的感情が社会を作り出していった機序を見出すことができると考えました。

このように論文においては、記憶や感情が相互作用のなかで言語によって構築されるという主張とは逆に､感情や記憶が社会を作っていく様を描いています｡また同時に感情（情動）や身体の視点を社会学に取り戻すことの重要性も主張しています。

福祉の非合理性に着目して――エロス・負い目・贈与

深田耕一郎（社会福祉研究所研究員）

2011 年度「福祉と贈与――ある全身性障害者の自立生活にかんする社会学的研究」と題する博士論文を提出しました。本論文は新田勲氏という脳性麻痺者のライフヒストリーと私が彼を介護するなかで見聞きした事柄に社会学的な解釈を加えたエスノグラフィーです。彼は日本における自立生活運動の最初の世代の人物で、その生活はきわめて個別的でありつつも人間の普遍的な特性が見られたことから、それを捉える論文の執筆を目指しました。

自立生活とは全身性の障害を持つ人が 24 時間に渡って介護者という他者の支援を受けながら暮らす生活です。日本では 1980 年代の半ば以降、アメリカの IL 運動の方法論を取り入れたスタイルが根付いてきています。介護を有償化し関係を割り切ることでサービスを気楽に利用したり、派遣システムを構築して利用者のもとへ介護者を提供する方法は福祉を合理化するもので、多くの人の利用可能性を高めました。

ところが、私の出会ってしまった新田勲氏はこれと正反対の世界を築いていました。彼は 70 年代に施設から出て地域で暮らし始めた人物で、IL 運動が入ってくる以前に、介護の制度化や有償化を要求した人です。にもかかわらず、その同じ人が「介護はお金で割り切るものではない」や「介護は関係が第一」といっていました。つまり福祉は合理的でない部分こそが大切なのだと主張していたのです。これはいったい何だろうと考えました。

たとえば、エロス。私は毎週毎週、彼と風呂に入っています。もちろん一人では入浴できない彼の身体を洗うのですが、私も入浴し自分の身体を洗います。これは身体を近づけることからしか他者を思いやることはできないという彼の思想によるもので、「君は大切な人の身体に触れるとき指先を丁寧に使うだろう。介護もそれと同じことだ」といいます。

それから、負い目。私たちは他者に負債を抱くような感情を持ちたくない。ですが、新田氏は私たちの負債感を明るみにだそうとします。私が「介護か研究か」で悩んでいたときも「君は論文を書けなくても生きていける。僕は君がいないと生きていけない」と書いた手紙をくれました。彼よりも優位な立場にある私の疚しさを突いてくる。その負い目感情を刺激し、負い目を解消すように介護にのめり込むことを求めてきました。

博士論文ではこうしたコミュニケーションを贈与の視点から考察しました。私たちは人に何かを与えたり、与えられたりする喜びを知っています。しかし同時にそれに拘束される苦しみも知っています。「モノを与える」という出来事は人間にエロスや負い目を喚起させる力があり、それゆえに事態を肯定的なものにも否定的なものにもする。けれど福祉の受け手は日々の生活保障が最優先だから、そんなものに振り回されてはいられない。そのために近代社会はできるだけ福祉の贈与性を排した合理的なシステムを構築してきた。

新田氏は介護の社会化を 70 年代から求めて来た人なのでシステムの構築に批判的ではありません。むしろ制度の整備を求めています。しかし同時に福祉から非合理的なものを排してはならないと考えています。なぜなら福祉が守るべき人間の尊厳は決して合理的には把握できない苦しみや痛みから発している。それを一挙に合理化しようとせず、その非合理性に振り回されたり苦悩したりしながら作り上げていくのが、福祉ではないのか。そこにこそ人間の「ドラマ」があるのではないか。彼はそう訴えているように思いました。福祉は合理的なシステムと非合理的なドラマの結び目にあるからこそおもしろい。今後もこうした点に着目した研究活動を行っていきたいと考えています。

≪2011 年度　活動報告≫

【社会福祉のフロンティア】

第 33 回

テーマ：スウェーデン成人教育の歴史と構造
　　―『リカレント教育』はどのように生まれたのか
日　時：2011 年 5 月 30 日（月）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　太刀川記念館多目的ホール
講　師：太田美幸 所員

第 34 回

テーマ：働く女性とマタニティ・ハラスメント　～健康に働き産む権利～
日　時：2011 年 12 月 2 日（金）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　14 号館 D501 教室
講　師：杉浦浩美 研究員
参加者：35 名

【各種セミナー】

第 19 回家族援助技術セミナー（MSW・高齢者領域）

テーマ：MSW　　医療ソーシャルワーカー（MSW）のための解決構築面接
　　高齢者　高齢者と家族支援のための解決構築アプローチ
日　時：MSW　　2011 年 5 月 14 日（土）13：00～16：30
　　高齢者　2011 年 6 月 25 日（土）13：00～16：30
場　所：MSW　　池袋キャンパス　ミッチェル館 1 階セミナー室
　　高齢者　池袋キャンパス　5 号館 5205 教室
講　師：安達映子 客員所員

2011 年度　第 1 回、第 2 回家族コミュニケーションセミナー

テーマ：第 1 回　初級、第 2 回　中級
日　時：第 1 回　2011 年 6 月 18 日（土）10：00～16：00
　　第 2 回　2011 年 10 月 22 日（土）10：00～16：00
場　所：第 1 回、第 2 回　池袋キャンパス　ミッチェル館 1 階セミナー室
講　師：河東田誠子 客員所員

【研究例会】

第 1 回

テーマ：福祉と闘争――戦後日本における全身性障害者の公的介護保障要求運動にかんする社会学的研究
日　時：2011 年 5 月 23 日（月）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　ミッチェル館 1 階セミナー室
担当者：深田耕一郎 研究員

第２回

テーマ：ジェンダー・家族政策をめぐる福祉国家の比較政治学的分析
日　時：2011年7月25日（月）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　ミッチェル館１階セミナー室
担当者：浅井亜希 研究員

第３回

テーマ：厚生労働白書にみるわが国の精神保健福祉施策と入院者からみる精神科病院
日　時：2011年11月28日（月）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　ミッチェル館１階セミナー室
担当者：松原玲子 研究員

第４回

テーマ：震災後の地方財政と社会保障（a）
　　福祉と贈与――ある全身性障害者の自立生活にかんする社会学的研究（b）
日　時：2011年12月19日（月）18：30～20：30
場　所：池袋キャンパス　ミッチェル館１階セミナー室
担当者：田中聡一郎 所員（a）
　　深田耕一郎 研究員（b）

【コラボレイティヴ・ワークス研究会】
日　時：2011年7月2日（第1回）、8月6日（第2回）、9月3日（第3回、台風のため休会）、10月1日（第4回）、11月5日（第5回）、12月10日（第6回）すべて13：00～16：00
場　所：池袋キャンパス　ミッチェル館１階他
講　師：安達 映子 客員所員
登録者：10名

【科研費による調査研究】

2009年度～2011年度科学研究費補助金（自立とソーシャルワークの学際的研究（課題番号：21330142））。研究代表は庄司洋子所員。3年間の研究成果報告として、2012年1月28日（土）13：00～17：00に科研費報告会を開催した。（発表順）

・自立をめぐる哲学的考察：障害の当事者の自立と平等（河野哲也 副所長）
・自立概念の再検討―臨床社会学のアプローチから（深田耕一郎 研究員）
・デンマークにおける障害者所得保障制度―障害者と経済的自立（菅沼隆 所員）
・生活保護と障害者（田中聡一郎 所員、百瀬優 研究員）
・スウェーデンと日本の障害者支援から見る自立―支援者が阻む自立（河東田博 所長）
・母子家庭対策からみる自立と地域―子どもの福祉と教育保障の視点からの考察－（湯澤直美 所員）
・精神保健福祉施策からみる自立と地域（酒本知美 研究員）

【その他イベント】

日本福祉文化学会　高齢者アクティビティ開発センター　主催（社会福祉研究所共催）
第2回「アクティビティ・ケア実践フォーラム」
テーマ：震災後のアクティビティ・ケアの必要性とこれから～
日　時：2011年10月29日（土）13：30～17：00
　　2011年10月30日（日）10：00～16：00
場　所：池袋キャンパス　14号館

【新着図書情報】

〔雑誌〕＊は定期購読
『質的心理学研究　第10号』　新曜社＊
『社会福祉研究　110－112』　鉄道弘済会＊
『介護福祉学　18巻1号、2号』　日本介護福祉学会＊
『子どもの虐待とネグレクト　第13巻1号－3号（通巻31－33)』　日本子どもの虐待防止研究会＊

〔佐藤悦子所員寄贈図書〕

2010年5月、長年にわたり社会福祉研究所を支えてくださっていた佐藤悦子先生が逝去なさりました。生前からご所蔵なさっていた書籍を立教大学にご寄贈するご希望を示されておりました。そのため、社会福祉研究所では、2010年7月からおよそ1年間をかけ、多くの方のご協力を得て、ご寄贈いただいた約1000冊の書籍の整理をさせていただきました。

総合研究センター図書室におよそ350冊の書籍を配架いたしました。目録が和書・洋書ともにホームページに掲載されておりますので、ご閲覧ください。また、図書室に配架できなかった書籍は、広く研究に活用していただきたいという思いから、青空市（2011年5月9日～23日）を開催いたしました。毎日、多くの学生などが訪れ、熱心に選書をしていた姿が印象的でした。最後には、佐藤悦子先生が長く活動をされていた日本家族心理学会がすべての図書を引き取ってくださいました。

佐藤先生の書籍の整理を通し、改めて佐藤先生のお人柄にも触れていたような気がしています。そのため、図書室への配架、青空市や学会への寄贈を通し、社会福祉研究所にあった書籍が徐々に無くなっていく様子は、嬉しい一方で、寂しい気持ちもありました。

今回の書籍の整理については、多くの方のご協力がなければ実現できなかったものだと思っております。貴重なコレクションをなさっていた佐藤悦子先生はもちろん、寄贈をご快諾いただいたご家族、データベースの作成や図書の整理などご協力いただいた皆様にも感謝しております。佐藤悦子先生の書籍を通して、今後の研究活動に生かしていただけることを期待しております。　（文責：酒本）

発行：立教大学社会福祉研究所
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3－34－1
Tel：03－3985－2663
Fax：03－3985－0279
e-mail：r-fukushi@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ISW/